

目 次

序 章	1
言語の特殊性	1
認知科学と言語習得	7
本書の視点および構成	13
第 1 部 言語とは何か	19
第 1 章 言語の意味	23
1.1 指示説	23
1.2 使用説	27
1.3 創られる意味	30
1.3.1 事前知識と文脈	30
1.3.2 記号過程	37
第 2 章 記号と言語	44
2.1 有縁的記号と恣意的記号	44
2.2 概念とは何か	47
2.3 意味の体系	54
2.3.1 対比に拠って立つ意味	54
2.3.2 意味領域	57
2.3.3 感覚運動的基盤と社会的基盤	60

2.4 意味の普遍性と個別性	63
2.5 第1部のまとめ	71
第2部 信号から記号へ：環境から見出す意味	73
第3章 コミュニケーションにおける信号	78
3.1 動物の信号コミュニケーション	78
3.2 人間の信号コミュニケーション	82
3.3 発達初期の信号コミュニケーション	85
第4章 象徴の発生	90
4.1 身体論とシミュレーション	90
4.1.1 認知発達理論	90
4.1.2 シミュレーション	92
4.2 直接知覚が形成する記号の基盤	98
4.2.1 共鳴と連合	98
4.2.2 統計学習	100
4.3 2つの「類似」	104
4.3.1 類像性と言語習得	104
4.3.2 類像性の信号的側面	107
4.3.3 類像性の記号的側面	109
4.3.4 有縁記号の普遍性と個別性	112
4.4 記号接地問題：マッピングとピックアップ	117
4.4.1 マッピングの意味観	117
4.4.2 ピックアップの意味観	119

第5章 象徴から記号へ	125
5.1 三項関係コミュニケーション	126
5.1.1 二項関係と三項関係	126
5.1.2 三項関係コミュニケーションへのステップ	129
5.1.3 コミュニケーションはいつから間主観的か	133
5.2 協力性・共有志向性	136
5.3 第2部のまとめ	141
第3部 記号から言語へ：文化から見出す意味	143
第6章 共有基盤の構築	146
6.1 言語習得と共有基盤	147
6.1.1 共有基盤とは何か	147
6.1.2 4つの共有基盤	149
6.2 他者に対する期待と調整	152
6.2.1 調整の2つのレベル	152
6.2.2 養育者の足場かけ	154
6.3 イマ・ココを基準として	163
6.3.1 指さしの利用	164
6.3.2 タイミングを合わせる	167
6.4 コミュニケーションにおける「演じ」	170
6.4.1 描写的モード	170
6.4.2 有縁記号と恣意的記号の使い分け	176
第7章 言語的意味へ	180
7.1 言語的意味の推論方略	180
7.1.1 慣習と対比	180

7.1.2 推論のバイアス	183
7.2 意味領域構築のステップ	188
7.3 語の意味関係の調整	194
7.3.1 過剰汎用と過小汎用	195
7.3.2 分節の適切な基準をどう見つけるか	198
7.3.3 意味の対比による手がかり	201
第8章 意味の体系を紡ぐ	207
8.1 属性（形容詞）の場合	207
8.1.1 色語の領域	209
8.1.2 感情語の領域	213
8.2 事物（名詞）の場合	216
8.2.1 容器の領域	216
8.2.2 基礎レベルを超えて	219
8.3 事態（動詞）の場合	224
8.3.1 動詞語意における言語個別性	224
8.3.2 経口消費の領域	226
8.3.3 所持の領域	227
8.3.4 切断・破壊の領域	232
8.3.5 移動の領域	233
8.4 インプットの量と質	237
8.5 意味体系の構築と社会化	240
8.5.1 文化的思考様式	240
8.5.2 専門的共有基盤と言語	245
8.6 第3部のまとめ	249

終章 問題と展望	253
言語観・意味観について	254
信号と記号について	257
記号と言語について	260
引用文献	263
おわりに	291
索引	295